

力石



〔登録年月日〕平成一八年三月二二日  
〔種別〕有形民俗文化財（娯楽・競技）  
〔名称〕力石  
〔点数〕一六個  
〔所有者等〕井草八幡宮  
〔所在地等〕善福寺一―三三―一

## 力石

力石の起源は石占いの一種で、かつてはこれを担ぎ上げることで、その年の豊凶を占ったといわれている。米俵を担ぎ上げて一人前といわれていた時代には、若者たちがそれ以上の重さの力石を担いで競い合い、力試しをしたといわれる。力石を担ぐ力比べは、若者たちの普段の遊びであり、神社の祭礼の時に行われたという。

井草八幡宮の力石は、幕末期（伝）から大正七年（一九一八）までに奉納されたもので、合計一六個が、現在神楽殿裏にまとめて設置されている。石には重量や奉納者などが刻まれ、軽いもので「二十七目」、重いもので「五拾八貫余」と刻まれている。奉納者は旧上井草村の他、関村（練馬区）や成子町（新宿区）の地名も見られる。

『井草八幡宮誌』によれば、紀硫石、青龍石と刻まれたものは、幕末期、「小美野豊次郎方において、紀州家に入入りしていた頃、豊次郎が珍しい力持ちで、殿様御前で、この石を担ぎ上げたので、下賜せられ、それを神社に奉納したので、かかる名称をつけたとのことである。」という伝承を紹介している。また、『同誌』大正七年（一九一八）一〇月一日の記事には、例大祭の時に氏子の中の力持ちが社前で石担ぎを演じその力を競い合い、その際に用いた四つの力石を奉納したことが記録されている。

これらの力石は、幕末期から大正期における杉並地域の農

村青年の生活の一端をうかがわせる資料である。

【文化財所在地】

